

血みどろの大量殺戮と
激烈な戦いのなかに
人間の残酷さをえぐった
ペキンパー・バイオレンス!!

SAM
PECKINPAH'S
**Cross
of Iron**
✠

サム・ペキンパー

〈カラー作品〉

ジェームズ・コバーン ◆ マキシミリアン・シェル
ジェームズ・メイソン ◆ センターバーガー

戦争はあつた

■製作ボルフ・C・ハルトビヒ ■監督サム・ペキンパー ■撮影ジョン・コクイロン ■音楽アール・ネイト・コールド

■松竹・東北新社共同提供/富士映画配給



■あのペキンパーがついに作った 最高の戦争アクション!

「ワイルド・パンチ」「ゲッタウェイ」そして「わらの犬」と、次々に衝撃的な話題を投げかけるパイオレンス派の巨匠サム・ペキンパー監督が、初めて第二次大戦を題材にして、今までにない超迫力の戦争大アクションを作りあげた。

全篇目を奪うアクションと、彼お得意の超暴力シーンが随所に見られる画期的な作品である。背景が戦争だけに、ペキンパーならではのショッキング・シーンが爆発。はらわたをえぐるような人間の残酷さを浮き彫りにさせたこの映画は、早くも77年の話題を独占する野心作と評判を呼んでいる。

■迫真のドラマ! 戦争の残酷さを再現!

1943年、ナチス・ドイツとロシアが激突していた。ジェームズ・コバーン扮する鬼軍曹ひきいるナチスのならず者部隊は、連隊からロシア前線部隊の排除命令を受ける。その指揮のため、新任の指揮官がやってくるが、彼は勇敢さと卓抜な指揮をした者に贈られる、最高の栄誉章アイアン・クロス欲しさに、自我をむきだしにした男だった。

反目しあう鬼軍曹と指揮官。やがて部隊は総攻撃を開始、想像を絶する大激戦に突入していく…。

国と国だけではなく、人種間、人間間でも戦争は戦争であるとのテーマを前提に、ペキンパー監督は、息もつかせない痛快なドラマ展開の中に、戦争という名のもとにおこなわれる争いの醜さを、大胆に表現している。

■スタッフ

製作……………ボルフ・C・ハルトビヒ
監督……………サム・ペキンパー
原作……………ウイリー・ヘンリック(耐える肉体)より
撮影……………ジョン・コクイロン
音楽……………アーネスト・ゴールド

■キャスト

スタイナー軍曹……………ジェームズ・コバーン
キャピテン・ストランスキー……………マクシミリアン・シエル
ブラント陸軍大佐……………ジェームズ・メイスン
シスター・エド……………センタ・バーガー

■超ド級の迫力! ショッキング・シーンの連続!

戦争につきものの残酷シーンが、これほどリアルに多く出現する映画も少ない。敵の女兵士を捕え、むりやりフェラチオさせた兵隊が、彼女に局部を食いちぎられるショック・シーンを始め、頭に弾を打ち抜かれた瞬間の血しぶき、弾にあたって背中から洪水のようにふきでる血潮、自動小銃で数十発も体に射ちこまれるシーン、戦車におしつぶされる兵士の死体…。正視できない残酷なシーンが、4台のカメラを使ったペキンパーお得意のスローモーション撮影で、次々に登場してド胆を抜く。

■使った弾薬35万発!

製作費 600万ドルを注ぎこんだこの国際的超大作のロケは、ユーゴで行なわれたが、ハリウッドから 200名のロケ隊が現地へ飛び、戦闘シーンにはユーゴ軍の 600名の兵士が参加した。映画の冒頭からラストまで、休みなく続く戦争シーンに使用された弾薬は、小火器用のものだけでも35万発。1発が25セントにつくのでこれだけで10万ドル。他に数千発の20ミリ砲、地雷、手榴弾が使われた。

■豪華スターの顔あわせ!

超大作にふさわしく出演者も国際スターが勢揃い。先ごろペキンパーと共に来日したジェームズ・コバーン(「荒野の7人」「電撃フリントGoGo作戦」)をはじめ、「トプカピ」のマクシミリアン・シエル、イギリスの名優ジェームズ・メイスン、「わらの犬」のデビッド・ワーナー、「ガンディー」少佐」でおなじみの名女優センタ・バーガーなど。



サム・ペキンパー 戦争はらわた

＜カラー作品＞

次回大ロードショー

東 地下鉄東銀座下車

銀座

東

劇

(541)
2711

伊勢丹斜め向い

新宿

京王

(356)
3518